

微笑みと夕焼けと菩薩像

—資料館のお宝紹介②—

喬木村歴史民俗資料館長
青木 隆幸

「夕暮れは大きな書物だ。すべてがそこに書いてある」(谷川俊太郎)

阿島の町、逢橋ちうはしのもとに育ちました。権現山に沈む夕陽を、橋から眺めるのが好きでした。椋鳩十先生の生家はすぐ近く。先生も夕暮れが好きでした。幼い頃、美しい夕焼けにたくさん出会っていたからでしょう。「椋先生」よりも「彦穂少年」の方が、私には身近です。伊那谷の山は、高からず低からず、遠からず近からず。この絶妙な距離感の中に、刻々と色を変えながら沈んでいく夕陽は、見飽きません。

資料館のエントランスに菩薩像を据えました。作者は彫刻家成田青畔なりたせいはん(一九四一—二〇〇二)。奥さまが喬木村出身なのでご存知の方も多いでしょう。樺太出身。東京で活躍し、世界各地で個展を開いた後、晩年を高森町で創作に打ち込みました。彼もまた、伊那谷の夕暮れに心奪われた一人です。「日が沈み」西の峰々の稜線が、薄明るい空をバックに、黒くくっきりと映し出される。夫は、その色を見て、「黒い色の中に、全ての色が観える。この色が、玄、なんだろうな。この、玄、

を表わす作品を創りたい」(成田夕紀子「夫、成田青畔」)

エントランスの菩薩像、穏やかな笑みを浮かべています。これが青畔さんのいう「玄」なのか、私には分かりませんが、当館を訪れるこどもたちの笑顔は、この菩薩そっくりです。

四月から、「道、交流、体験」をコンセプトに展示のリニューアルを進めています。大きく長い旅の途上で、あるいは旅の終わりで、伊那谷の自然や歴史に出会った人たちの作品を取り上げようとしています。その意味でこの菩薩像は、当館が目指す北極星。みなさんを迎えるエントランスにふさわしい作品だと思いました。

もう一つ。当館は、一万年という時間と、人々の交流の痕跡こんせきが刻まれた縄文の土器や石器を多数所蔵しています。実際に持って、重さや厚みを体感してもらいます。そして、見学の終わりは「縄文の丘」紹介。ここも夕焼けが美しい。シンガポールから来た若者たちは「縄文のかたまりだ」と目を輝かせていました。

人は誰も、その人だけの「夕暮れ」と「書物」を持っています。展示品や解説を通して、「書物」をひもとくお手伝いができればと願っています。

